

〔翻訳〕

『ザストロツィーロマンス』(8)

パーシー・ビッシュ・シェリー 著
治村輝夫 訳

第十六章

「卑しい悪党は自分の咎として恐怖を持つ。
汝は勇者を苦しめる者だ」

『マーミオン』

審問官の一人が目上げた。調べていた書類をもとに戻すと、重々しい声で彼女の名前を尋ねた。

「名前はマチルダ、称号はラウレンティーニ女伯爵」高慢に彼女は答えた。私はその審問の目的も知りません、私の苦難を楽しもうとするのだらうということ以外は。そのことをあなたがたはもちろんご存じでしょう」

「われわれが行っていることについてつまらない推測をして」審問官が厳しく語気を強めて叫んだ。「自分の時間を無駄にしないように。それで、あなたは自分がどのようなことで召喚されたのか知っていますか？」

「いいえ」マチルダが答えた。

「何の罪で自分がここに収監されているのかを知らない、と誓いなさい」審問官が言った。

マチルダは求められたとおりに誓った。話す時に露のような汗がひたいから吹き出し、手足は恐怖が極まって痙攣したが、顔の表情は変わらなかった。

「この法廷の通知を受けることになるどんな罪を犯したのですか？」断固とした声で彼は詰問した

マチルダは勝ち誇った嘲笑を浮かべただけで、答えなかった。彼女は審問官をじっと見つめた。その黒い目はぎらぎらと激しく光ったが、彼女は何も言わなかった。

「答えなさい」彼が叫んだ。「告白すれば私たち二人の無駄な労力を省けるでしょう」

マチルダは答えずに、黙って審問官の顔をじっと見た。

彼は三度足を踏みならした——四人の役人が飛び込んできて、マチルダから少し離れたところに立った。

「身分の高い生まれの女性を無礼に扱いたくないが、もしあなたが直ちに告白しないと、私の

義務として質問を保留することができない」

いっそう強い軽蔑の表情がマチルダの美しい顔を隈取った。

「この愚かな強情さに固執するつもりですか」審問官が叫んだ「役人たち、義務を遂行しなさい」

それまで後ろに立っていた四人の役人たちが間髪を入れず飛び出した。マチルダをつかむと、部屋の薄暗いところに連れていった。

彼女の乱れた巻き毛がアラバスターのような胸の上でゆったりと、きらびやかに揺れた。軽蔑するようなまなざしが今は驚いたような、当惑した表情に変わっていたが、その目はほとんど閉じられていた。彼女の均整のとれた体は、四人の役人に連れさられる時、興味をそそくくらい美しく見えた。

これまで目の前にある書類で忙しくしていて、マチルダの尋問に注意を払わなかったもう一人の審問官が目を上げ、女の姿を目にすると、やめろと役人たちに命令口調で叫んだ。

従順に彼らはその命令に従った。——マチルダは情け容赦のない法の召使たちの獐猛な手から解き放たれると、テーブルの方に進んだ。

彼女の非常な美しさに、最後に口を開いた審問官の気持ちが和らいだ。そのように天的に人目を引く姿の奥に、邪悪で、悪鬼のような墮落した心が潜んでいようとは、彼はおよそ思いもよらなかった。

それで彼はやさしく彼女に話しかけた。そしてそのうちいつか彼女の審問が再度行われることを告げると、身分によりふさわしい部屋に案内するよう役人たちに命令して、その管理下に置いた。

彼女が役人たちについて行った部屋は広々として家具類がよく備わっていたが、高いところにある窓には大きな鉄格子がしっかりと取り付けられていて、こじ開けるのは不可能だった。

再びひとりになり、再び自分ひとりの希望のない思いにふけた——その回想はひたすら恐怖と絶望だった——未来の希望はなかった——不安は多く、恐ろしかった——マチルダの状況は言葉で叙述するよりも想像するほうがやさしい。

想像の中に浮かぶその考えは乱雑な混乱の中を漂い、恐ろしくて耐えがたかった。

そのようにこの世での幸福をすべて奪われ、ヴェレツィへの情熱が激しかったので、それが失われたことで抗いがたい恐怖が高まり、彼女の頭はこの上なく激しい精神錯乱におちいった。惨めなマチルダはそれでも死にひるんだ——悪事を働いたことではいかなる良心の呵責も彼女の魂に触れなかったし、そのことについて今でも後悔していなかったが、犯した罪の罰にひるんだ。それが彼女から地上の喜びを奪ったのだった。

自分の将来のありさまについて思いを巡らせた——絶対者の存在を否定するザストロツィの主張について思いを巡らせた。心の奥底で今はその主張の誤りを認めていたので、自分の状態は取り返しのつかないことを思い、身震いした。

抗いがたい恐怖が胸の中で騒いだ。激しくさいなむ思いの中で、彼女はせかせかと部屋の中を歩き回った。ついには圧倒されて、ぐったりとソファに倒れ込んだ。

騒々しい激情はついにそれ自体の激しさに疲れ果てて、おさまった。つい今し方までマチルダ

の心を騒がしていた嵐がやんだ。その後に澄みきった静けさが続き、眠りがすぐに体の働きに打ち勝った。

眠りの影響下にある間、混乱した幻想がマチルダの想像の中を去来した。ついにそれらはひとつの形に定まった。

奇妙に輝かしい銀色の雲が目の前を飛んでいるようだった。天球のハーモニーのように心をとらえる天上の音楽がマチルダの心を落ちつかせると、一瞬彼女は自分の状況を忘れてうっとりとしていた。

突然音楽がやんだ。天の紺碧の凹面が天頂で開いたように見え、言い表しようのない慈悲に輝く顔をしたものが降りてきた。

それは銀でできた、ゆったりとした、透き通るローブを着ているようだった。目は人間のものではない輝きできらめいていた。その間、その夢は現実をおよそ正確に写していたので、うっとりとしたマチルダにはそれがこのような言葉で話しかけているように思われた。――

「哀れな、罪を犯しているマチルダ！ 悔い改めなさい。まだ手遅れではない。――神の慈悲は限りがない。悔い改めなさい！ そうすればおまえはまだ救われるかもしれない」

ひどく混乱してソファから起き上がった時、これらの言葉がまだマチルダの耳に残っていた。夢の中で自分に話しかけた幻像をまるで追うかのように、まだその目は天に向けられていた。

現実かと見まがうばかりの夢はマチルダの心に強い印象を与えた。

つい先ごろまで胸の中で激しく戦っていた凶暴な感情がおさまった。彼女は天に向けて目を上げた。その目は心から悔い改めた表情で輝いていた。この瞬間の心からの悔い改めはマチルダの心を静めるいっぽうで、苦痛だった。

「恵み深き神様！ 天の神様！」マチルダは叫んだ。「私の罪は数多く、恐ろしいものですが、私は悔い改めています」

マチルダはどのように祈ればよいのかわからなかった。しかし、天の高みから地上にいるものの心の奥底にある思いを見通す神は、偽りのない、苦しい悔恨の涙を浮かべて彼女が神の前にひざまずいた時、見捨てられたこの罪人の声を聞かれた。

彼女はもはや絶望していなかった――自分の造り主の情け深さを信頼していた。それで、この上なく堅固な心の持ち主もその力に震えてしまう逆境の時に、かたくなな罪人はもはや慈悲を求めなかった。そして、慈悲は、謙虚に、しかし善意を信じてそれを求める者に、天におられる情け深いお方から拒否されることは決してないのだ。

マチルダの心はこの世ならぬ静謐に満たされた。無言の、誠意を込めた思いの中で、ひざまずいたままだった。彼女は祈った。そして震えながら、自分の造り主の赦しを乞うた。

もはや絶望の苦悶が胸を苦しめてはいなかった。確かに彼女は不安だった。自分が犯した罪に対する悔恨が深く彼女に影響していたのだ。そして、彼女の救済の望みは大きく、神と未来の状態に対する信念は確かだったけれども、胸からどっと吹き出た深いため息は悔恨の矢が心を深く射し貫いていたことを示していた。

数日が過ぎ去った。その間にマチルダの心の激情の葛藤は悔恨によって制圧されて和らぎ、穏

やかな憂鬱となって定着していた。

第十七章

天が崩れてその破片が打っても、
平気にいるだろう。

ホラティウス

マチルダが公開裁判にさらされる日がついに訪れ、十人会議の法廷に引き出された。

審問官たちは以前とは違って、部屋の中央にあるテーブルのところにいた。しかし高座のようなものが片方の端に立っていて、そこに彼女がこれまで見たことのない厳めしい顔つきの男が座っていた。おびただしい数のヴェネチア人が集まっていて、部屋のあらゆる側に並んでいた。

黒い被服を着た数多くの者が上官の椅子の後ろに配置されていた。マチルダはその中に以前に自分を取り調べた者たちを認めた。

二人の役人に先導され、よろよろとした足どりで、青ざめた頬をし、うつむいたマチルダが上官が座しているところに進んだ。

乱れた髪の毛は結ばれずに、肩の上になびいていた。均整のとれたその優美な姿は薄い、白いローブに包まれていた。

きらめく目の表情は下に向けられ、謙虚だった。それでも目の前の光景に動揺している様子を見せずに、黙って裁きの場にいた。

美しい罪人の愛らしさを見つめる時、みんなの好奇心と哀れみは強くかきたてられた。

「あの女は誰だ？ あの女は誰だ？」と問うささやきが部屋中を駆けめぐった。——誰も答えられなかった。

再び深い静寂が支配した——ぞっとするような静けさを妨げるささやきひとつもなかった。

ついに上官がいかめしく厳かな声で言った——

「ラウレンティーニ女侯爵マチルダ、おまえはストロバッツォ女侯爵殺害の罪で召喚されている。おまえはそれを否定できるか？ そうではないと証明することができるか？ 私はいかなる信念にも耳を貸す用意がある。誰か被告を弁護する者はいないか？」

彼は言葉を切った。さえぎられることのない静寂が支配した。再び彼は口を開こうとした——再び嫌悪と恐怖を浮かべて、射るような目で震えるマチルダをじっと見すえ、決定的な判決を言い渡そうと口を開いた。その時、群衆の中から飛び出し、早口で叫ぶ男に注意を引かれた——

「ラウレンティーニ女侯爵は無実です」

「おまえは誰だ、大胆にもそう主張するのは誰か？」疑う様子で上官が叫んだ。

「私は」男が言った「フェルディナンド・ツァイルニッツ。ラウレンティーニ女侯爵の召使のドイツ人です。私は女侯爵が無実であると思いきって断言します」

「おまえの証拠は」顔をしかめた陰しい表情で上官が叫んだ。

「私が部屋に入ったのは」フェルディナンドが答えた。「遅い時間でした。その時血を流している二つの死体を見ました。そしてラウレンティーニ女侯爵は意識を失ってソファの上に倒れていました」

「待て」上官が叫んだ。

フェルディナンドは命令に従った。

上官が黒い被服を着た一人にささやくと、まもなく二人の役人がふたの開いた柩を肩にかついで入ってきた。

上役は床を指さした。役人たちは荷物をおろすと、凝視する群衆の恐怖に打たれた目に、無数の、ぞっとするような長く深い傷でおおわれたユリアを、美しいユリアを見せた。

そこにいる誰もがみな恐怖の叫び声をあげた——誰もが恐ろしい光景にぎょっとし、衝撃を受け、仰天した。それでも、一部の者たちは落ちつきをとり戻して、哀れにも復讐の犠牲となった者のこの世のものとは思えない美しさを見つめた。それは、死に征服されることなく、今なお穏やかな顔からこぼれていた。

深いため息をついて、マチルダの胸が波うった。固い決意にもかかわらず、涙が目にとどと溢れ出た。そして彼女はめまいのするような恐怖でほとんど気を失いそうだったが、それに打ち勝つと精いっぱい勇気を奮い起こして、恋敵の死体の方へ歩みよった。そして体をおおう無数の傷に自分の将来の運命が決するのを見た。

彼女はなおもじっと見つめた——深い静寂が支配した——見物人はとても興味を引かれていて、誰一人として言葉を発するものはなかった——広々とした部屋の中はささやきひとつ聞こえなかった。

「離れろ、罪に汚れた、無慈悲な女」ついに上官が激しく叫んだ。「おまえの前に倒れている——おまえに殺害された——哀れな女性を生涯にわたって迫害しただけで十分だろう——だから、おまえの復讐がまだ満たされていないかのような目つきで彼女をじっと見るのをやめろ。下がれ、女。役人たち、この女をおまえたちの監視下に置け、その間に、もう一人の被告人を連れてこい」

二人の役人が前に飛び出して、マチルダを裁き場から少し離れた場所に連れていった。他の四人がそびえ立つような背丈の男を引き連れて入ってきた。両足を縛る重い鎖はその男が前に進む時にがちゃがちゃと音をたてた。

マチルダは目を上げた——ザストロツィが前に立っていた。

彼女は飛び出した——役人たちは身動きせずに立っていた。

「ああ、ザストロツィ！」彼女は叫んだ——「私たちが歩んだ人生は恐ろしく、邪悪でした。行き着く先は卑しく、恥辱的でしょう。二十四時間が経過する前に私たちが悔い改めなければ、私たちを責めたてる永遠の苦悶は激しく、恐ろしいかもしれません。ですから、悔い改めなさい、ザストロツィ。悔い改めなさい！そして、徳からそれた背信においてあなたは私の連れだったのですから、私にならって、執拗で頑固な邪悪を放棄しなさい」

これが低い、口ごもった声で言われた。

「マチルダ」軽蔑するような罪深い笑みを顔に浮かべて、ザストロツィが答えた。「恐れることはない。運命は私たちに死ぬよう命じるだろう。しかし私は静かに死に立ち向かうつもりだ。無に直面するつもりだ。神など存在しないことを私は確信しているのではないか？ 死はこの魂をさらに自由にするだけだと私は確信しているのではないか？ ならば、どうして私は死に身震いする必要があるのだ？ 精神が偏見の束縛を、偽りで有害な迷信の過ちを、高く越えてしまっているのに、どうしてそうする必要があるので？」

ここで上官が口をはさみ、これ以上私的な会話は許されない、と言い渡した。

それでマチルダから離れて、ザストロツィは自分の前の恐ろしい光景に平然として、苦悶に満ちた死（まもなく自分が経験するものと今や確信していた）がすぐ側に近づいていることにも動じることなく、上官の椅子の方へ進み出た。

誰もがザストロツィのそびえ立つような姿を見つめ、威厳に満ちた態度と揺るぎのない落ちつきに、マチルダの美しさに驚嘆した以上に、驚嘆した。

誰もが黙って見つめ、何かとてつもない告発が彼に対してなされるだろうと予測した。

自分を裁く人物を軽蔑するように見つめている罪人が上官に、自分は多くの無用な面倒を省くであろうから黙るように、と言った時、彼が口にしたザストロツィの名前はすでに沈黙を破っていた。「私は人殺しだ」ザストロツィが言った。「それを否定しない。私は自分を傷つけた者の心臓に剣を埋めた。しかし私を暗殺に駆り立てた動機は申し分なく、また称賛に値するものだ。というのは、愛する母上の死の床で、母を裏切った者の欺瞞に復讐することを誓ったのだから。

「私がその行為を遂行する間、私が罰を恐れたと思うのか？ あるいは、親の大儀に復讐する間、ここで私が受ける運命であるつまらない苦悶が私の決意に何か重みを持ったと思うのか？ いや——とんでもない。私の汚れない母上に悲惨な死をもたらした非道な裏切り者がその復讐を誓った者の剣のもとに倒れたのなら——これによって、私が自分自身以上に愛している人の平穏を破壊したやつをあの世界に送り込んだのなら、私は非難されるべきだろうか？」

ザストロツィは言葉を切り、軽蔑した、勝ち誇った表情で腕を組んだ。

「続けろ！」上官が叫んだ。

「続けろ！ 続けろ！」広大な部屋の至るところで同じ言葉が繰り返された。

彼は周りを見た。その態度は興奮した群衆に畏敬の念を起こさせた。そしてさえぎられることのない沈黙の中、真ん中に半神半人のようにそびえ立っている、平然としたザストロツィを見物人たちは見つめた。

「それでは、私の心に痛ましい記憶を呼び起こすことを明らかにしろと求められるのか？ ああ、なんと痛ましいことか！ しかし、かまわない。この腕の下に倒れたやつの名前をおまえたちは知ることになるだろう。そいつの思い出は今でもことばで言い表すよりももっと忌まわしい。私は自分の行為を誰が知ろうとかまわない。その公正さを確信しているし、未来永劫その確信は変わらないのだから。——では教えてやろう。オリヴィア・ザストロツィは私の母だった。この女性にはあらゆる徳が、好ましく、並外れたあらゆる特質が集まっていた、と私は固く信じている。

「私の術策によって六日前にラウレンティーニ女侯爵の邸宅で自殺したやつの父親は、私を生んだ母の弱さの瞬間につけ入って、辱めた。やつはこの上なく神聖な誓いをたてて、母と結婚すると断言した——しかし、やつは裏切った。

「母はまもなく私をこの世に生んだ——誘惑したやつは他の女と結婚した。そして、捨てられたオリヴィアが飢えから身を守るためにわずかな手当てをくださいと頼んだ時、高慢な裏切り者は戸口で母をはねつけ、自分の職をまっとうしろと嘲るように母に言った。——『偽証の罪を犯した者め、おまえと共に私が犯した罪によって』やつの戸口から立ち去る時、母は叫んだ『私は最後を迎えるだろう！』——そして、本当に！ 母は気高く振る舞った。偽りの誓いの犠牲となった母は若くして墓に入った。三十歳になる前に、亡くなったのだ。——母の汚れない魂は永遠の幸福へと飛び去った。けっして私は忘れないだろう——母が死んだ時私は十四歳に過ぎなかったが——けっして母が最後に命じたことを忘れないだろう。『息子よ』母は言った『私のピエトリノ、私への不当な仕打ちに復讐しておくれ——偽証したヴェレツィに恨みを晴らしておくれ——永遠にあいつの子孫に復讐しておくれ』

「そして、ああ、私は彼らに復讐したと思う。裏切りの悪党は見かけは難攻不落とみえる豪奢に囲まれていたけれども、この腕が罰するための勇気を与えられたその罪をやつは忘れていたけれども、私が二十四歳になる前に、私の短剣のもとに倒れた。しかし、私が滅ぼしたのはやつのからだだけだった」飽くことを知らない復讐の恐ろしい顔つきで、ザストロツィがさらに言った。「時が私に知恵を与えてくれた。やつの息子のたましいは永遠に地獄落ちの運命だ。あいつは自ら破滅したのだが、私のたくらみが、見えないところで、あいつの破滅に功を奏したのだ。

「おや、ラウレンティーニのマチルダ！ なぜ身震いするのだ。おまえが繰り返し突き刺して、今日の前の柩の中に命を失って横たわるあの女を破滅させた時、自分の運命がどうなるかを考えなかったのか？ おまえは自分が崇めるあいつとこれまで楽しくやったではないか——あいつと結婚もしていたではないか——そして、ひと月以上の間、言葉で言い表せないほどの喜びを味わったではないか——それなのに、私はそうではないのだ！」彼は突然激しく笑いだしながら、さらに言った。「ああ、かわいそうな、愚かなマチルダ！ おまえがヴェレツィを手に入れられるように私が教えたのは、友情からだと思ったのか？ いや、違う——おまえの計画に熱心に加わる気にさせたのは、復讐だったのだ。そのために、おまえの夫の激しい情熱に及ぼす影響を予想して、あそこに死体となって横たわっている女をおまえの家に仕向けたのだ。

「さて」ザストロツィがさらに言った。「判事殿、おまえに包み隠さずに話した。判決を下せ——だが、私には自分の運命がわかっている。だから、恐怖の代わりに、死の到来に幾分かの満足を感じる。なぜなら、この世で私がしなければならないことはすべて果たしたから」

ザストロツィは言葉を切った。そして、平然と意味ありげな視線で上官をじっと見すえた。

ザストロツィの毅然とした態度に驚き、彼がそのようにはっきりと告白した罪に衝撃を受けて、上官は恐怖に顔を背けた。

なおもザストロツィは不動のまま立っていた。

上官は黒い被服を着た一人にささやいた。四人の役人が駆けよると、ザストロツィを拷問台

に据えた。

神経が張りつめるおよそ耐えがたいほどの拷問の苦痛で悶える間も、ザストロツィの毅然とした態度は失われることなく、魂が照らしだされた顔にはこの上なく軽蔑した嘲笑が浮かんでいた——そして、勝ち誇った復讐の狂気じみた発作的な笑い声をあげながら、彼は死んだ。

完